ライダー送信および受信系の偏光面同時制御による背景光抑制効果の実証

鈴木 秀彦 [1]; 山本 晃寛 [2]; 阿保 真 [3] [1] 立教大: [2] 信州大: [3] 首都大・システムデザイン

A Lidar experiment to reduce background noise by controlling planes of polarization for both transmit and receiver systems

Hidehiko Suzuki[1]; Akihiro Yamamoto[2]; Makoto Abo[3] [1] Rikkyo Univ.; [2] Shinshu University; [3] System Design, Tokyo Metropolitan Univ.

A lidar is a powerful tool for an atmospheric study between troposphere and thermosphere which can deduce an altitude profile of temperature, density, and optical properties of clouds. An SNR of signal is significantly disturbed by continuum emissions from a daylight (Rayleigh and Mie scattering of the sun and the moon lights) and artificial lights from a city. In particular, a sky light from the Sun is greater about 5 orders than night time continuum emission which significantly reduces a precision of the lidar observations during daytime. Fabry-Perot etalon, and Faraday filter are often used in a lidar receiver to reduce a background light. In addition, a polarizer is also useful to cut background light because sun light scattered by an atmospheric molecules are polarized. In particular, a sky light which satisfies scatter angle of 90 degrees is nearly in linear polarized. Therefore if a receiver telescope can track such direction with diurnal motion, a sun scattered light from the direction can be efficiently suppressed by the polarizer. However, it is necessary to control both a transmitter (a laser) and receiver if we try to apply this principle to a lidar observation. In this paper, the result of an experiment using a simple lidar system equipped with a half wavelength plate and a polarizer to test the effect of above method to reduce background noises in daytime observation.

対流圏から熱圏までに至る大気温度や雲の観測に威力を発揮するライダーは、地上から打ち上げたレーザー光の各種 散乱体による後方散乱光を受信することで、散乱体およびその周辺における大気パラメータ(温度、密度、消散など)の 高度プロファイルを導出可能な優れた手法である。ライダー受信系には、レーザーによる後方散乱信号の他に、太陽や 月などが大気分子やエアロゾルによって散乱される光や、街明かりなどの連続光成分が同時に測定されるが、これらの バックグラウンド光によるショットノイズは、観測対象である散乱体からの後方散乱光(信号)の SN 比を悪化させる要 因となっている。特に、夜間(天文薄明以降)にくらべて昼間における背景光成分は4-5ケタ以上も強度が大きく、ライ ダーの昼間観測における障壁となっている。ライダー観測で一般に用いられている背景光抑制の方法としては、ファブリ ペロエタロンやファラデーフィルターによる狭帯域化、視野の狭小化などがある。その他、偏光素子も背景光除去に効 果を発揮する。偏光素子は、太陽光が大気によって散乱された光が偏光状態にあることを利用して、シグナルのもつ偏 光面(=レーザーの偏光面)以外の光(=背景光)を除去するものである。 背景光は主に太陽からの散乱光であり、太 陽と観測者の見ている方角の関係にもよるが、ほとんどの場合、楕円偏光状態で望遠鏡に入射する。したがって、直線 偏光であるレーザー光だけを偏光素子により透過させることによって、それ以外の成分(=背景光)を最低でも 1/2 程度 まで落とすことができると期待される。特に、散乱角が90度付近となる場合、観測者から背景光をみると背景光は直線 偏光しているように見える。したがって、この偏光面から 90 度ずらした偏光面内でレーザーを送信し、受信系の偏光素 子により、レーザー成分だけを受信すれば、背景光を大幅に抑制することができる。 この効果は、偏光面が太陽方位角 と平行にあるとき最大となる。したがって、この原理をライダーシステムに応用する場合、送信レーザーと受信系の発 信および透過偏光面を、太陽方位に同期させて同時に制御させる必要がある。 本発表では、送信系に 1/2 波長板、受信 系に消光比の高い偏光プリズムを導入することで簡易ライダーシステムを構築し、上記原理に基づく背景光抑制方法の 効果を実証した結果を報告する。